



あんげろす第69号

著者	深谷 美枝, 今村 正夫, 小林 孝吉, 鈴木 進, 徐 正敏
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
巻	69
発行年	2016-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/2672

あんげろす

不思議な話

深谷美枝

特別研究年だったせいで、大著の翻訳をする傍ら、いろいろ考え行動する時間が与えられた。

一つの目玉は安保法案反対国会前デモ、である。周囲のキリスト者たちと共に二回参加した。

感じたことはマスコミの嘘と、権力の強圧性、である。参加人数が最大だった日、主催者は十万と発表していた。しかし、ある新聞は通信社の空撮だけで、現場にも足を運ばずに3万、と言った。付近の幾つかの地下鉄改札数からだけでも、推定6万を優に超えていたのに、である。

乳幼児から高齢者までの平和な市民デモなのに、機動隊の参加者への対峙の仕方は威嚇的・強圧的であった。首相の命令一下、市民を手にかける可能性もゼロではないと実感した。

怒っているうちに一年が過ぎた感じ。しかし、何故だか血圧は不思議なことに下がってしまったのである。



第 69 号

2016年3月

関係修復への努力

今村正夫

戦争を巡る刑事裁判が今も続いている。ナチス・ドイツのアウシュビッツ強制収容所で看守をしていた94歳の男性の裁判が2月11日に始まった（CNN 2016.2.12）。17万人の殺害を手助けした疑いによる殺人幫助の罪を問う裁判である。裁判では収容所の生存者らが証言を行う予定だ。今後2件の裁判が予定されているという。死の門がある第二強制収容所ビルケナウの慰霊碑には、犠牲者約150万人とある。その大半はユダヤ人。犠牲者にはポーランド人や同性愛者、障がい者なども含まれている。戦争は悲惨な破壊である。ホロコーストに関与した存命のナチス関係者を、とことん立件しようとするドイツ当局の態度を知らされる。この史実にドイツは避けて通ることができないということであろう。地道な戦後の修復作業でもある。破壊されたものを元通りにするのは簡単ではないのだ。

そのドイツに、ナチス・ドイツによって破壊されたものを修復し続けている団体がある。「行動、償いのしるし、平和への奉仕」（Aktion Sühnezeichen Friedensdienste）というNGOである。一人のドイツ人キリスト者による教会再建などのボランティアから始まり、50年以上の歴史を持つ。強制収容所跡での草むしりもする。現在、国際的な和解プログラムを通して、戦争被害者たちに救援の手を差し伸べている。元事務局長の言葉が印象的だ。「我々が苦しめた諸国民に対し、償いのため行動することをゆるしてもらおう。償えたかどうかは被害者に判断してもらいます」。初めはドイツ人というだけで石を投げられたとも。現地で若者がボランティアを行い、歴史認識を話し合う。「歴史は人の記憶の中で生きている。それが時に、他者との摩擦を引き起

こす」「平和は、そうした心の痛みを導くことから作られるのです」（毎日新聞 2008.8.27）。

アメリカの軍事力だけで人類どころか、地球を滅ぼすことができる時代が続いている。その覇権の胸にいだかれてわたしたちの国があるし、わたしたちがいる。これが安心なのか。アメリカの敵は、自動的に日本の敵となり、思ってもいない犠牲が生じるのではないか。強い軍事力を持てば安全なのだろうか。現状のままの日米の安全保障体制と軍事力強化の流れに、恐怖を感じないのか。日本はアメリカに気を遣って、原爆で得た教訓のメッセージを出さないように努力している、との鶴見俊輔さんの言葉が忘れられない（毎日新聞 2007.1.10）。前を向いて出し続けるのが安全保障の道ではないか。

今から25年ほど前に、小田実さんの「何でも見てやろう」という精神に刺激されて、インドネシアに貧乏旅行をした。スマトラ島にある第四の都市メダン。その教会スタッフのついで、トバ湖のバタックというキリスト者少数民族の村に一週間ほど滞在した。果物の王様と呼ばれる、あの強烈に臭いドリアンを初めて食べた地でもあったので、この地は記憶が薄れない。暴風で飛んだ教会建物の屋根の修復などを手伝った。「イマムラさん歓迎」であったが、日本人というだけで石を投げられてケガをした。聞くと、侵略した日本人は大嫌いだという人がいるとのこと。

歴史認識には相違がある。オランダからインドネシアを救った日本という歴史観がある。特に当時のイマムラ（陸軍司令官今村均）には、インドネシアを解放した人物として高い評価がある（秋永芳郎『陸軍大将今村均』）。歴史は資料によってつくられると聞いた。ましてや勝者によって。歴史は人々の記憶の中で生きている。それらが時に摩擦を引き起こすのは本当だ。そんな中でボランティアに汗を流し、共に飯を食べ、深く刻まれた心の傷を引き受けることが信頼回復への一歩になったの

は事実であった。人間対人間の悲惨な破壊が繰り返されてきた。しかしその度に、心ある人々の地道な修復作業があちこちで続けられてきた。そのこともあって人類が今日まで破滅せずにいられたことは想像に難くない。

加えて自然対人間の問題である。関係修復の努力を続けなければならない。

いまむら・まさお（協力研究員）

内村鑑三と再臨信仰

——『内村鑑三——私は一基督者である』を刊行して

小林孝吉

明治維新の7年前の1861（万延2）年、江戸高崎藩の武士長屋に生まれ、武士の子として儒教的教育を受けて育った内村鑑三。彼は16歳で、明治初期の北海道にクラークの開いた開拓使附属札幌農学校の二期生として入学し、「イエスを信ずる者の契約」に半ば強制されて署名し、キリスト者としての道を歩むことになる。

以後、メソジスト監督教会ハリスにより受洗、札幌農学校卒業後は札幌県御用係として北海道の漁業調査に従事したあと、苦悩の渦のなか、心の奥に真空をかかえたまま渡米し、エルウィンの知的障がい児養護院で看護人となり、アマスト大学でシーリー総長と出会い、内村鑑三の信仰の出発点となる贖罪の回心を経験する——。

私は70年代のはじめに、まだ明治学院の学生の頃、プロテスタントの作家・椎名麟三の入信前の『永遠なる序章』を偶然に目黒の古本屋で見つけ、狭い下宿で読み始めるやいなや魂の震えるような衝撃を受けた。そこには、椎名麟三の洗礼、回心前の精神の暗夜に**つとて**一条の眩

い光が差していた。その小説は、主人公の貧しい青年が余命3カ月を宣告され、墓のように見える病院を振り返るところからはじまり、わずか7日間鮮烈な、戦慄的な自由とともに生き、労働運動のデモの最中にこの世を去る物語である。

それから40年間、私は椎名麟三の文学については、『椎名麟三論 回心の瞬間』『椎名麟三の文学と希望——キリスト教文学の誕生』を、また滝沢克己のインマヌエルの神学とも出会い、『滝沢克己 存在の宇宙』などを書いてきた。その光源は、椎名麟三の文学では「復活」であり、滝沢克己の神学では「インマヌエル」の原事実であった。

だが、2011年3月11日の東日本大震災、福島第一原子力発電所のメルトダウン事故という文明的転換点に遭遇して、椎名麟三、滝沢克己から、内村鑑三へ、その再臨信仰へと導かれていった。

私はこの3年間、内村鑑三の生涯と、天然の宇宙を教会とした無教会信仰、日清戦争を経て戦争廃止論へといきついた非戦論の水脈、さらに『永遠なる序章』の死を超え、多くの死者とともに、「3. 11」という人類史的困難に直面した社会へのイエス・キリストの再臨信仰——それを自らの信仰への文学的旅、自由への道として、『内村鑑三——私は一基督者である』（御茶の水書房、2016年1月）を書き下ろして刊行した。

私にとって内村鑑三との出会いは、どれほど大きかったことだろう。私は『内村鑑三全集』（全40巻）と、彼が信仰のすべてを注いだ『聖書之研究』（1900—1930年、全357号）と向き合い、そこには、ポスト「3. 11」の未来社会への希望が、神の**ことば**が響き合っていることを知った。

日本近代とともに、69年間の生涯を無教会の一基督者として生きた内村鑑三。彼は死の2日前に、すでに予定されていた内村鑑三古稀祝賀感謝の会に、心臓衰弱の

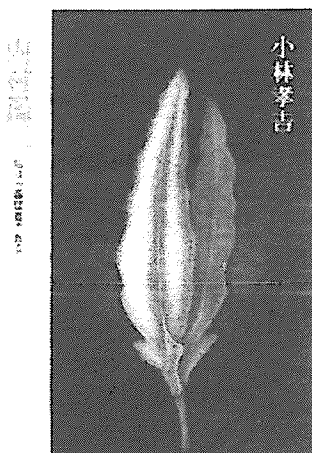
重態のなかで、床の上に正座して、出席者に向けて、感謝、満足、希望などという短い言葉とともに、次のような最後のメッセージをたくしたのである。

《聖旨にかなはず生延びて更に働く。然し如何なる時にも悪き事は吾々及び諸君の上に未来永久に決して来ない。宇宙萬物人生悉く可なり。言はんと欲する事盡きず、人類の幸福と日本國の隆盛と宇宙の完成を祈る。》

宇宙は、神とともに、完成へと進化し、神の言は、悲しみ、苦しみに満ちたこの世にも静かに響き、人生という涙の谿にも、人知れず一輪の花が咲く。「樂園喪失」から「樂園回復」へ——。そんな宇宙完成への希望は、内村鑑三の再臨信仰のなかにあるのではないか。私は『内村鑑三——私は一基督者である』を書きながら、そのことを何度も実感した。

内村鑑三の贖罪による回心、イエスの十字架、復活、その究極としてのイエス・キリストの再臨は、未来社会への純福音なのである。

こばやし・たかよし（協力研究員）



『内村鑑三——私は一基督者である』

著者：小林孝吉（文芸評論家）、2016年1月、御茶の水書房

『あさが来た』と明治のことは

鈴木 進

昨年9月から始まったNHK連続テレビ小説『あさが来た』を毎日楽しみに見ております。今朝は加野屋の若奥様あさが、五代友厚伝授の「カンパニー」、「会社」について店の者たちに説いて聞かせる場面でした。明治も初めの日本社会にはそのような言葉も制度も存在しなかったわけですから、姑のよのさんならずとも聞く者はみな戸惑ったことでしょう。

あさと同時代の日本に生きたヘボン先生はこれらの言葉を何と定義しているか、『和英語林集成』を繙いてみましょう。「会社」はKUWAI-SHA, A company, association, —mostly used for a mercantile company. (再版、1872)、「英和の部」COMPANYはNakama, sha-chiu, そして3番めにkuwai-shaが載っている。同じ時期に出た辞典類を見ると、それらの多くは「ヨリアヒナカマ」が語義でした。あさが最初に手懸けた事業は「炭鉱」経営である。この言葉はどうか。TANKŌ, タンカウ, A coal mine. (三版、1886)。ドラマはこの後どのような展開になるのか知らないが、あさのモデルとなった実在の人物広岡浅子は石炭の輸出のために門司港に「税関」を申請したとのこと、「税関」をヘボンの辞書（初版）に求めるとCUSTOM-HOUSEが載っており、訳語はunjōshoでした。明治5年の版もまだUNJŌ-SHO、三版になって初めてZEIKWANとなっています。1872年出版、木版刷『新約聖書馬可傳』の2章14節、アルバヨーの子レウヒが座っていたのは「税貢をおさむるところ」とヘボン・ブラウンは訳しています。

浅子が後年創業した「保険」会社も日本の社会に馴染のうすいものだったに違い無い。ヘボン辞書三版はHŌKENホウケン (ayauki wo ukeai), HOKEN, Insurance : —gaisha, —company; semei—, life—, 。

それでは、ほぼ同じ時期に出た『言海』は何と言っているか。「ほけん」「險難、損亡ヲ償ハムコトヲ予メ請負フコト」とある。ついでにもうひとつ『日本大辞書』（大和田建樹編、博文館、1896）も見てみましょう。そこには「其製造し若くは預りたる物品に損害ある時は自ら之を償ふの責任を負損して保証する事。…又人の生命に対して死亡の日約束の金額を払うべき一種の方法にも云ふ」、とある。これなら現在でも立派に通用します。浅子の“seimei hoken kuwaisha”、大同生命、その命名の由来はいかにも彼女らしい。大同とは「小異を捨てて大同につく」によるとのこと。創業が1902（明治35）年だから、その頃になれば「保険」も日本社会に受け入れられていたのでしょう。

広岡浅子の年譜を見ると、彼女は63歳の時、大阪の教会で宮川経輝牧師より「洗礼」を受けた、と記されています。浅子は大病を患い、手術を受ける。一時は死も覚悟したものの、麻酔から覚めようとする中で、何か「神の力」のようなものを感じ、その後神を受け入れてクリスチャンになったのだそうです。ここの「洗礼」という語はヘボン辞書にどう書かれているか、初版には載っていないが、明治5年版にはSEN-REI, 洗禮, Baptism. とある。再版の出た明治5年といえば、日本はまだ禁教下、高札撤去1年前の記述である。そのような中であって、ヘボン辞書の読者の間ではこの言葉がすでに知られていたのです。

「銀行」という制度も明治初中期の日本人にわかり難いものだったらしい。加野屋の番頭雁助が設立を容易に承知しなかった「銀行」は『和英語林集成』、三版になってやっと登場する。GIN-KŌ, 銀行, A bank, 用例は一shihei : bank note.、記述はこれだけ、それ以前の辞典類は「リヤウカエヤ」（『画引小学読本便覧』（明治9年）、「カネノカハセカタ」（『必携熟字集』（明治12年）など。両替商の加野屋は加野「銀行」になり、

旦那の栄三郎が「頭取」と呼ばれることになるそうです。「頭取」をヘボン辞書に引いてみました。TŌDORIはA headman, chief, a commandant. と、1867年の版に載っておりました。“tōdori”が明治のことばではなく、既に慶応3年には日本語になっていたのを知った時の私もまた「ビックリボン」でした。

参考書

- 『広岡浅子』（三オブックス）
- 『広岡浅子の生涯』（別冊宝島）
- 『広岡浅子のすべて』（日経BPムック）
- J.C.HEPBURN, 『和英語林集成』一復刻版（北辰）
- J.C. ヘボン著, 『和英語林集成』一復刻版（東洋文庫）
- J.C. ヘボン『和英語林集成』（講談社学術文庫）
- 惣郷正明、飛田良文編『明治のことば辞典』（東京堂出版）

すずき・すすむ（協力研究員）

雑録

徐 正敏

世界では戦争の気運が高まってきています。特に東アジアでは、和解と平和の流れより、対決と葛藤の雰囲気が増強として起こってきています。

私は2月11日から15日まで、韓国の歴史学者や宗教学者たちと一緒に、沖縄、石垣島地域で研究フィールドワークを行いました。そのテーマは「戦争と平和」でした。東アジアの近代の歴史における戦争の記憶と傷痕を真剣に考える機会になりました。

明治学院大学キリスト教研究所の重要な役割の一つが、

キリスト教の平和思想を世界の中に具現化する学問的な貢献であると思います。今回の『あんげろす』でも、そのようなテーマに関連するエッセイが非常に多いのです。

4月からはキリスト教研究所の新執行部が責任をもって研究所の研究活動を支えていきます。来年度も皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。

そ・じょんみん（本学教養教育センター教授、主任）

研究所活動（2016年1～3月）

キリスト教芸術研究プロジェクト公開研究会

「バッハのマタイ受難曲 ―その成立の謎をめぐって」

開催日時：2016年2月20日（土）14：00-16：00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館1405教室

講師：江端伸昭（フェリス女学院大学非常勤講師、本学非常勤講師）

講師・司会：加藤拓未（明治学院歴史資料館研究調査員、本学キリスト教研究所協力研究員）

2015年度キリスト教研究所3月研究会

開催日時：2016年3月10日（木）15：00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館81会議室

発表①

「1920-30年代における韓国キリスト者の『内地=日本』認識 ―文化統治から戦時下への転換期における変化過程を中心に―」

発表者：洪 伊杓 協力研究員

コメント：徐 正敏 主任

発表②

「一山室機恵子から娘民子、そして阿部光子へ 救世軍山室家の女性達が探った他者救済と自己解放への系譜」

発表者：牧 律 協力研究員

コメント：大西晴樹 所員

3月研究会後の懇親会

開催日時：2016年3月10日（木）18：00-

開催場所：五反田 勇山亭

キリスト教主義教育研究プロジェクト公開講演会

「プロテスタンティズムの倫理と民主主義の“精神”

―北星学園大学問題がキリスト教学校に提起した課題とは―

開催日時：2016年3月12日（土）15：00-17：30

開催場所：明治学院大学白金校舎本館81会議室

講師：高橋 一（学校法人・北星学園理事、本学非常勤講師）

新着図書

・『福音と世界』No. 1、新教出版、2016。

・『福音と世界』No. 2、新教出版、2016。

・『福音と世界』No. 3、新教出版、2016。

・『バトリスティカー教父研究―』第19号、教友社、2016。

・『説教黙想 アレタイア』No. 91、日本基督教団出版局、2016。

・『サムエル記 上』W.ブルッゲマン、中村信博訳、日本キリスト教団出版局、2015。

寄贈

・『平和と和解への道のり —「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」20年の歩み—』、「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」実行委員会編、2015。

・『内村鑑三—私は一基督者である』、小林孝吉著、御茶の水書房、2016。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第69号

2016年3月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩